

## 目 次

- 趣味としての読書 ..... 山 口 志 保 (1)
- 学生の時に (三重短生に思うこと) ..... 青 木 隆 男 (5)
- 新規受入図書案内 (1999年4月~1999年7月受入分) ..... (8)

### 趣味としての読書

山 口 志 保

都立大学時代、学生さんに「趣味って何ですか」と訊かれ、迷わず「読書」と答えたところ、「それって趣味といえるんですか」と言われ、戸惑ったことがある。

確かに、研究者を志して以来、すべきことは日夜(?)勉強、そして研究で、文系である以上その姿は読書が圧倒的割合を占めることとなる。傍目からすると、仕事としての読書と趣味としての読書の区別がつきにくいこととなるのは、容易に想像がついた。ただ、本人にはしっかりとした自覚があり、どちらもある程度の楽しみを得るという点では同じであっても、リラックスしながらの読書は趣味の領域に入り、研究目的または職業上の必要に応じての読書は、知的興奮をもってしてもリラックスにはほど遠く、従って趣味とはかけ離れたものとなる。

更に、リラックスしながらの読書といっても、いつの頃からか、自由な想像力のなせるまま、その世界に没することはできなくなっている。その世界を楽しみながらも冷静に、作者が表現しようとしている社会観、思想を意識的であれ、無意識的であれ、読みとろうとしている読者としての私も同時に存在していることは、当然でもあり、残念なことでもある。今日の読者としての私には、本が与え

てくれる世界に迷い込むという意味では、少女時代のような体験は望めそうもないが、本の与えてくれる感動の質は、ずいぶん多彩になったのではないかと、少々自負している。

そのような意味で、最近出会った本に覚えた感動を、この場で披露させていただきたい。

ヴェネツィアの宿 須賀敦子 文春文庫

12編の短編エッセイで構成されているこの本は、著者の十代の頃から四十代ぐらいまでの様々な体験を、時系列とは別に並べ、エッセイそのものの持つ魅力もさることながら、その並べ方により、一冊全体に様々な色調をなす織り合いが感じられる。ただ、このような感想は、私がこの場で述べるまでもないことであろう。私が本校に赴任することが決まり、女性研究者としての生き方を見つめ直し、また、家族との関わり方を確かめていくべき、丁度その時期にこの本と出会い、共感を得たことを、個々の随筆から述べさせていただきたい。

私の場合、大学卒業後まっすぐに社会に出るよりも、まだ勉強したりないと感じ、それ以上の目的を持つことなく、大学院に進学してしまった。「しまった」というのは、理系はともかく文系では、その後の進路は、研究者として歩くことができるように、自らを鍛え上げる以外に殆ど途は閉ざされており、そのことに気付いた時には、もう後戻りをする気が全くなくなっていたという、何ともお粗末な進路選択だったからだ。ともかく、生来

のんびり屋である私は、師に恵まれたことが幸いして現在の姿となったが、それでも振り返ってみると何とのんきであったかと自らを呆れるばかりである。

幸運だったことを自慢しようとしているのではなく、先達である女性研究者たちが確固たる目的意識を持ち、一步一步踏み固めきておられることに、今更ながら尊敬の念を深め、遅ればせながら私自身あるべき姿を見失わないようにとの思いを馳せるに至ったのは、本書の一節による。

『大聖堂まで』で、作者は一人で二日かかりの運転をしてミラノからパリに着いた。そこは作者が初めて留學生活を送った土地で、当時憧れのような気持ちで眺めていたホテルに部屋を取り、窓から見たノートルダム寺院の姿に、パリでの生活を回想する構成となっている。「大聖堂」とはノートルダム寺院を指すのではなく、フランス全土の学生による巡礼で目指したシャルトル大聖堂を意味している。

第二次大戦前に家族を日本に残してヨーロッパ周遊をした父親の理解によるものか、1953年に女性が留學を果たすことができたのは、やはり恵まれていたのだとも思われよう。その留學生活で、作者は行き詰まりを感じるようになっていた。「言葉の壁はもちろん私を苦しめたが、それよりも根本的なのは、この国の人たちのものの考え方の文法のようなものへのつながりがつかめないことだった。自分とおなじぐらいの年齢で、自分に似た知的な問題をかかえているフランス人との対話が、いや、対話だけでなく、出会いさえが、パリの自分にはまったく拒まれているように思えて、私はいらだっていた。大学での比較文学の講義の愉しみとはべつに、こればかりは自分の手でさぐりあてなければ、どうしようもない。シャルトルへの巡礼は、そんな気持のなかで、ひとつの抜け道になるかも知れなかった。」

しかしこの抜け道は精神的、肉体的に非常に厳しいものとなった。「寝袋をまきつけたリュックには、二日分の食料、といってもハムとかチーズをはさんだ、あの皮のかりかりしたフランスパンのサンドイッチぐらいのも

のだったが、それと瓶に入れた飲料水と、喉が乾いたときに囓るレモンが数個、夜は寒いかも知れないので厚手のセーター、などがはいっている」という重装備で夜行列車に乗り、ランブイエ駅から大聖堂までの約30キロの道のりをフランス中から集まった学生の集団で歩くものだった。留學生同士でのフランス語が殆どであった作者は、学生ことばについて行けず、その集団の中では孤立せざるをえない。そのような状況で、自らが歩いてきたこれまでの道のりを、自然と考えるようになっていた。

「家族の強い反対をおして大学に行き、大学院にまで進んだので、だれに対してかはっきりわからない負目を感じるがよくあった。ぐずぐずいってないではやく嫁に行け、それがいやなら修道院にはいればいい、と先輩に言われても、そんなんじゃないという気がした。自分で道をつくっていくのでなかったら、なんにもならない。そのころ読んだ、サン＝テグジュペリの文章が私を揺りうごかした。「自分がカテドラルを建てる人間になれば、意味がない。できあがったカテドラルのなかに、ぬくぬくと自分の席を得ようとする人間になってはだめだ」。

おそらく作者もそうであろうが、私も急進的なフェミニストという訳ではない。ただ、女性が社会で生きていくには、家庭外の社会が男性により作られたものである以上、様々な障害が男性よりも多くあるのは、これまで指摘されている通りである。社会で生きていくには、先人達が作り上げた社会の装置にすっぽりと収まろうとするのではなく、自らがその装置を利用できるように、そのような位置を築き上げようと努力すべきなのではないかと、感じるようになっていた。そういう時期に出会ったのが、この一節だった。

ただ、作者の言わんとするところに一つだけ疑問を抱く箇所がある。先の一節の少し前に書かれているのだが、ある意味で社会で途を切り開こうとしている当時の女性の苦勞に思いを馳せることともなる。「東京で大学院にいたころ、ふたりの女ともだちと毎日のように話しあった。ひとりには経済学を、もうひよりは哲学を専攻していたが、私たちの話題

は、勉強のことをのぞくとほとんどいつもおなじで、女が女らしさや人格を犠牲にしないで学問を続けていくには、あるいは結婚だけを目標にしないで社会で生きていくには、いったいどうすればいいのかということに行きついた。」

社会だけでなく家庭でも「女の子らしさ」「男の子らしさ」などとの表現が、性差別につながるとされ、避けるようにする風潮が定着した。かくいう私も、両親にこの言葉を出されると非常に反発していたものだ。その意味で、作者達が求めた「女らしさ」とはどのようなものなのだろうか。単に行儀の良し悪しをこの言葉で表現しているとは思えない。今の私たちが解釈するとしたら、人としての礼節をわきまえ、かつ自らの長所と思しき人間性を損なわないようにすることでもなるか、作者に訊いてみたいところである。

さて、このような思索をしていた作者は、食料も底をつき、足を引きずりながらようやくシャルトル大聖堂に辿り着くが、すでにミサは始まっており、外でスピーカーの説教を聞き、外から大聖堂を眺めるだけで帰らねばならない。それでもさっぱりとした気持ちになったようで「待ちあぐねただけの聖者というのもわるくない、と思っていた。」と記している。この巡礼は抜け道となったのであろう。

この留学は二年で終え、作者は日本の両親の許に帰国した。『旅のむこう』にその頃の様子が記されている。「二年後にパリから私が帰国したとき、父は家が明るくなったといって喜び、毎日、会社から帰ってくると、私にヨーロッパの話をさせては、それを自分が行ったところと比べて、そうか、なにもかも戦争で変わったのだな、と溜息をついたり、そうだろう、ヨーロッパはそんなところなんだ、と大声であいづちを打ったりした。まるで一人前のように父と話ができるのはうれしかったし、留学中の耐乏生活のあとでもあり、私は両親の家での生活がむしろ愉しくて、のほほん遊びほうけていた。」

実は作者の家庭生活は、作者が大学生のころからぎくしゃくしていた。その顛末は『夜半のうた声』にあるが、父親が一方向的に招い

た両親の不和があり、作者の努力により父親を家庭に引き戻したという経緯がある。私にはそのような経験が乏しいので、想像の域を超えることはできないが、おそらく両親の間の精神的な結びつきは、相当希薄なものとなったのだろう。そのような家庭で、作者は父親が愉しんでくれる姿に、素直に喜びを感じ、「のほほん」と過ごすことに躊躇いを覚えることもなかったのだろう。この後、作者と父との絆は、ヨーロッパにあると言っても過言ではない。

ただ、母親は冷静に娘の姿を見つめ、帰国後の変わり映えない毎日に、いらだちを感じ始めていた。「フランスまで行ったのは、おまえ、どういうことだったの?」「どういうことって、そうねえ」いつになく鋭い母の矛先を私はありきたりの冗談でかわそうとしたが、母は笑わないでつぶけた。「このところ、自分の生き方をサボっているみたいなおまえを見ていると、わたしはなさけなくなるわ」母はいった。——中略——「一日も早く、東京に行くなりなんなりして、自分の考えていたような仕事を見つけてちょうだい」

今まで地方大学への就職は、両親の圧倒的優勢で、当然ながら私は一人暮らしをすることは望むべくもなかった。「結婚したら、考えられるかもね」などとも言われたものだったが、現実に結婚してみると、そう簡単に決心できるものでもなかった。それがこの度単身赴任と相成って、引っ越し先のセッティングの手伝いに来てくれた母がぼつりと、「母が生きていたら、私のしたかったことを全て娘にやってもらって、良かったねと言ったと思うわ」と言った。

結婚してからの生活で、親の許にいた頃とは異なり、両親との距離について考え直しが必要なことが、しばしばあったものだった。言葉を悪くすると「子離れ」の必要性を訴えたい思いにとらわれたこともあった。また娘時代のような気ままさは、もはや許されないものと痛感させられることもしばしばあった。

それが、母のこの言に、文字通り「目から鱗」の思いがした。私の場合、母親とは娘の生き様について、わがことのように、思いを巡らせているのかも知れない。それは例えば、

読書をしているときの私自身のように、冷静な私と、感情的な私の部分を、場合場合によって役割を分担しているように。

そのような目で、作者の母親の伶俐な判断があったとも考えられる。作者は当時の生活では、自己を冷静に判断する目を失っていた。「とてもかなわない、というのが、あのとき私が母にむかって抱いたほとんど畏怖に近い気持ちにぴったりかも知れない。留学というひと仕事をやってのけたと、どこかでひとりよがりにより自負し、一瞬油断していたのが、いきなり母にいいあてられて、しまった、と思うと、ずっと身が引き締まった。」

母親との関わり合いは、このように解すると理解しやすいものとなってくる。それに比して、父親とは、おそらくお互い気楽な関係のように思われる。このことは、両親の仲介をした作者にもあてはまるようで、作者の場合では先に一言したように、ヨーロッパ体験が、共通のよりどころとなっている。作者の父親のヨーロッパ旅行については、表題と同じ『ヴェネツィアの宿』に1935年暮れから約一年かけた旅程が「神戸から船で大陸に渡り、シベリア鉄道で、モスクワまで。ワルシャワ、ブタペスト、プラハなどには、そのままモスクワから行ったのだろうか。ソフィアやブカレストに行った話もたしかに聞いたことがある。オリエント急行にはイスタンブールから乗ったらしいが、ヴェネツィアでいったん本線をはなれて、ローマやナポリ、フィレンツェなど、イタリアの都市を訪れている。そのあとはアルプスをシンプロン峠を越えてパリに入り、ここに何週間かいたようだ。パリの街の印象よりも、シンプロンという地名のほうがより多く父の口にのぼったように思う。パリを後にしたのはベルリンのオリンピックを観戦するためで、おそらく、ミュンヘン、ウィーンに行ったのはその道すがらだったのではないか」と記され、更にその後ベルギーやオランダを訪ね、最後にロンドンで一ヶ月滞在したとされている。

格安航空券が入手しやすくなった現在からみても、相当の大旅行だったのは容易に想像がつき、作者の父親はこの大旅行を30歳そこで経験し、おそらくこの旅行が彼の最大

の誇りだったと考えられる。

そのことは留学の決まった作者への様子でも、見て取れる。「私がはじめてパリに留学することになったとき、父は大よろこびで、さっそく知人にたのんで船の手配をしてくれ、古い旅行案内書をとりだしてきては、毎晩のように寄港地の説明をした。もういいよ、パパが行くんじゃないでしょう、と冷たく私にあしらわれながら。」

1959年の二回目の留学中、作者はロンドンで二週間過ごすこととなる。以下の叙述は『オリエント・エクスプレス』にある。支出予定外のロンドン滞在の許可を願う手紙を父親に出したところ「それはよかった、金のことなら心配ないから、できるだけ長くロンドン生活を愉しみなさい。」との返事が来ている。いざロンドンでは毎日のように父親から手紙が届き、「自分もかつてひと月あまり滞在したことのあるロンドンに娘がいること、しかもその旅行の費用は自分が全て支えていることへの深いよろこびに文章が躍っていた」とされている。作者の、父親との共感については、さらにエディンバラ旅行に記され、何ともいえないユーモアが感じられるが、ここでは省略する。

親とのつきあいには、必ず別れが待っている。作者の場合、先に夫と死別しているが、次の別れが父親となる。そしてこのときも、ヨーロッパが二人を結びつけている。父親が重篤状態となった1970年、作者はミラノで翻訳の仕事をしている。そこへ父親の会社の人から電話があり、それまで土産を持参するとつまらなそうな顔しかされていなかったのに、初めて土産の品の指定がされた。それは「まったく意表をついた品物だった。かつて自分がそれに乗って旅をした、ワゴン・リ車の客車の模型と、オリエント・エクスプレスのコーヒー・カップ」だった。前者は容易に入手できたが、後者を求めに、作者はオリエント・エクスプレスが到着したミラノ中央駅のホームへ行き、車掌に直接交渉して一組プレゼントされる。

それを持ち、作者は羽田空港から病室に直行する。「父は待っていたかのようにかすかに首をこちらに向け、パパ、帰ってきました、

## 学生の時に

(三重短生に思うこと)

青木隆男

と耳もとで囁きかけた私に、彼はお帰りとも言わないで、まるでずっと私がそこにいていっしょにその話をしていたかのように、もう焦点の定まらなくなった目をむけると、ためいきのような声でたずねた。それで、オリエント・エクスプレスは……？」

作者は「ワゴン・リ社の青い寝台車の模型と白いコーヒー・カップ」をそっとベッド脇のテーブルに置くと、「それを横目で見ると、父の意識は遠のいていった。

翌日の早朝に父は死んだ。あなたを待っておいでになって、と父を最後まで看とってくれたひとがいて、戦後すぐにイギリスで出版された、古ぼけた表紙の地図帳を手わたしてくれた。これを最後まで、見ておいででしたのよ。あいつが帰ってきたら、ヨーロッパの話をするんだとおっしゃって」。

著書はここで筆をかおれる。

前述したように、私の単身赴任は、学問研究上だけでなく、私の人生という点でも、一つの転機となったと考えられる。現在の私の年齢は、20歳の頃には何をしているのかまったく想像のつかなかったものである。人が転機を迎える時期は、年齢を問うものではないだろうが、それを転機と感ずるかどうかは、その人次第と思われる。

私は今、そのようなときを迎えた。今後の人生に、どのように責任を持っていくものか、改めて自分自身の姿勢を問い直さねばならないだろう。このようなときに、『ヴェネツィアの宿』に出会い、様々な意味で共感することができたのは、素晴らしい邂逅と思う。

はじめに

今回は私が学生時代に興味を持った建築のことと、その頃の経験や反省を含め、できることならば20年前の学生が現役に戻れたらと思うことを、毎日目にする学生とダブらせながら書きます。

私の学生時代は、1980年代前半。現在と比べ社会の様子、人々の価値観や物価などの学生を取り巻く環境も大きく異なるため一律に考えることは困難です。しかし、自分の時代を振り返り今になって思い出してみると、その後の行動や価値観に大きな影響を与えた時期だったことを痛感します。

私のやってきたことを思い出してみると、建物を見るために各地を旅行し多くの体験をしたこと。また、それを通じて人と出会い刺激を受けたこと。建築のデザインや歴史的なことに強く魅かれ、先生方の研究室に通い続けより興味をかきたてられてコンペ（競技設計）に挑戦したことなど、単に学校とか講義という枠を超え興味のあること、やりたいことをしていたように思います。

旅行のこと

子供の頃から鉄道が好きで、旅行が好き、そして好奇心が強かったこと、さらに建築学科だったこともあり、ヒマをつくっては方々歩きまわっていました。それに『これこそ今しかできないことだ』というへんな信念もあり、実家に電話をすると「今どこから？」というのが親の第一声だった記憶があります。

これは今の学生にも共通することかもしれませんが、旅行の障害となったのは、学校の講義（必ず出席しなければならなかった科目や、提出物）と、“先立つモノ”つまりお金。

そこで、限られた時間とお金をより有効に使う工夫として、優先順位を決めた早めの計画（日程と予算のやりくり）と、友人の助けを頼りに、全体の調整をするためかなりの労を注いだ覚えがあります。しかし、後になって考えてみると目的達成のための方法として良い経験になったと思います。

## 旅行の目的について

私の旅行の目的は、建物や街を見ること。建築家の作品や歴史的背景から生まれた様式、伝統建築など、とくに対象を限定することなく『今の自分の持てるすべてで何でも見てやろう!』といった気分で自分の目で確かめること。専門の雑誌や本にカラー写真で掲載されているものをなぜ、わざわざ遠い現地まで見に行かなければならないのか? と疑問に思われるかもしれませんが、私はいつも目的地に向かって歩きながら同時にちょこちょこ寄り道をして街のようすも見るようにします。(これは今でも同じですが1日10キロメートル以上はごく普通に歩きます) そうすることで、その街の雰囲気や肌で感ずることができるからです。これは建物がそこに生まれる(建てられる)ために、それ以前からある周辺環境との関係(周囲との調和もしくは対比など)を考えるうえでとても大切なことだからです。

そして、建物のもつスケール感や材質感、さらに空間(3次元)的に捉えたプロポーションや設計者がその作品に込めた思いなど、やはり現地まで足を運んで実物を見ないと、その本質が伝わってこないと思ったからです。

多くのものを見ることによって、自分なりに解かってくる。そうするとモノの見方も変わり、考え方も違ってくる。それを続けることによって視野が広がり発想の幅も増してくる。こうしたことから、実際に見ること、体験することは建築設計のコンセプト(設計者が与えられた条件についてどう考え、全体のプランをまとめたのか)や建築形態(全体や各部分の詳細プランとデザイン)を考えていくうえで、最も重要なことだと思い「建物と街を訪ねる旅行」をかれこれ20年近く学生の頃より今も続けています。

次に、本題とは少しズレルかもしれませんが、当時の私なりの「貧乏旅行術」をいくつかご紹介させていただきます。(旅好きで貧乏を自認する貴女は今でも参考になるかも?)

## 旅費を安くあげる方法として

まず、学割をフルに活用し交通費を節約すること。当時は、今のように「トクトクき

ぶ(『青春18きっぷ』のようなもの)」もなく、片道を201キロメートル以上の旅程として2割引にするか(往復買えば学割1枚でOK!)周遊券に学割を利かせて目的地を一筆書きで合理的にまわるようにしました。長距離になると夜行の急行(別料金が不要)かドン行、北海道の時はフェリーを利用し、特急や新幹線は別料金が掛かるため乗ったこともなく、ヒコーキなどはそれこそ雲の上の話でした。

其店のキャッチコピー“早い、安い、うまい”ではありませんが、短時間で安く内容を凝縮するコツを覚えました。

## ユースホステルのこと

宿泊は、ユースホステル(以降YH)を利用し、ここでは宿泊費の安さ以上のものを得ました。

私の旅行のパターンとして都市間の大移動は、列車かバスを使い街の中は、前述したように必ず歩きます。そのため、昼食を取ることすら時間がおしくなり、YHの朝食でどんぶりめしを3ばい、夕食で5はいの“おかわり”をして昼食を抜くようにしていました。しかし、当時のYH利用者(サイクリング、ツーリングを含め)の多くはこうしたスタイルでした。サークルなどのグループ(多人数で騒ぐ目的)は少なく、個人もしくは少人数で旅行そのものに目的を持った人が多かったような気がします。

1部屋6人から場所によっては10人を越えることもあり、他人との相部屋(日本のYHでは、男女が必ず分けてあります。)でプライベートはありませんが、そこは同じような目的を持った個性の豊かな人たちの集まりなので、年代を越えていろんな話を聞くことができ多くのことを教わった気がします。

食事の後かたづけやミーティングで、見ず知らずの人と仲良くなって、思わぬ情報が入ったり、次の日にいっしょに行動したりすることもありました。

また、不思議なことに何の打ち合わせもないのに、YHで泊まり合わせた中には必ずと言っていいほど面倒見のイイおネエさんがいたり、各部屋に1人は時刻表マニアがいていっしょに計画を立ててくれたりと、家族的な雰

囲気でした。

当時のYHでは、泊まり合わせた人相互の交流があり、ホテルでは得られない体験ができました。時代と共にYHの運営形態も変わり、その多くがビジネスホテル化したのが残念です。しかし、外国人の宿泊者が多い（とくに東京、京都、広島、長崎）ので、外国人との話や、外国語の会話練習には今なおオススメです。

### 建築にのめり込む

「貧乏旅行」をしながら多くの建物を見て刺激を受けるほど、建築の設計、形態、様式、デザイン、構造、耐震性能、施工方法など、次々と疑問がでてきました。それで専門の先生方の研究室に通って、お話を伺い専門書を読み、資料を調べていく間に建築に対する興味や好み、そして何より「見方」が変わりました。たとえば、同じ建物を見ても前に見た時と比較して印象や見るポイント、さらに自分の中の何かが変わっていく気がしました。

建築というのは、生活に密着した住宅、ハレの場である劇場や百貨店などの商業施設から業務優先の事務所、倉庫……など用途も幅広くそれらを使用（利用）する人々も千差万別です。また、人々の身近な生活から社会基盤に至まで広く影響を及ぼす複雑で広域なものです。こうしたことから、人を知り、生活を実感し、社会を見つめる雑多な知識と経験が必要とされ、やればやるほど自分の狭さと無知を知り、だんだんとのめり込んでいきました。

なかでも次に掲げる2つの分野について特に興味を持ち現在も勉強中です。

そのひとつは、建築設計の考え方やコンセプト、プランニングに関する建築計画の分野。

建築は、同一条件においても設計者の考え方によって、まったく異なったでき方をします。さらに将来の変化にも対応できうる柔軟性と機能性、そして時が経っても古さを感じさせない、あきのこないデザインが要求されます。そのため、すべての人間に共通する普遍性と、時代の流れや変化を考え将来を見通した先見性を合わせ持つ計画が必要とされま

す。また、建物の建設には莫大な資金を要し、一度建つと長い間使われます。このように多くの複雑な問題に対処しながら創造しなければならないのが建築の設計行為で、その恐さ、凄さを痛感しました。そして同時に、自分の考えたことを“かたち”として表現したくなりコンペにも挑戦してみました。

もうひとつは、その建物はいつ頃、誰が、何のために造り、なぜこうした形態になったのか？ 時代背景と建築形態の関わりに関する建築歴史・意匠の分野。

建築は、造られる時代の社会を背景として生みだされるものであり、時代を映す鏡のようなものです。時代と共に変わる人々の価値観と要求、それに伴って新しい用途の建築が必要とされます。また、技術革新による新材料と施工法により、それ以前には考えられなかった形態が現れ、そこに時代の雰囲気伝えるデザイン的要素が加わって建築が表現されます。それには、時代、地域、民族、宗教、などを超えた共通性もあれば、その地域独特のものや設計者の個性によって生まれたものもあります。しかし、いずれにせよ建築形態の変遷を見ていくことは、社会の変化を具体的な“かたち”として捉えることであり、調べるほど奥が深く興味がつきません。

### 三重短生について

これまでやりたいことをやってきた私の学生時代の体験を書きましたが、現役の貴女はどんな学生生活を過ごしていますか？

私が思うに、短大は単に単位だけを取って卒業すればいい、知識だけを身につければいいというものではないような気がします。

仮にこれを肯定したとして、卒業後何年か経ち自分の短大時代を振り返った時、果たしてどんなことが思い出として残っているのでしょうか？——ここは価値観の分かれるところかも知れませんが——高校生や社会人とも違うのがこの時期。本人のヤル気次第で、今この時ここでしかできない友人、クラブ、ゼミそして趣味など、多くの体験が可能だと思います。だから、何んでもいいから『私は三重短でコレをしたんだ！』と振り返って想い

出せることやってみてはと思います。(少おせっかい！)

ところが、現在の短大を取り巻く状況として気になるのが就職活動の時期。ようやく学校に慣れた頃に活動を開始しなければならず、2年間がより短く感ずると思います。けれども、そんな状況だからこそ充実した日々を過ごし社会に出る前に多くのことを身に付け、次へのステップとしてほしいのです。しかし、今多くの学生は、「とりあえずバイト」感覚で空き時間を過ごしているように見えます。何をすることも“先立つモノ”は必要なので分らなくもないのですが、明確な目的もなく日銭を稼ぐだけでは、長い目で見ると何も残らない気がします。アルバイトは、社会勉強にもなり就職先を決めるための参考として良いことだと思います。できれば目先のギャラのみで選ばず、興味のある職種もしくは異業種を数多く体験しながら自分の適性を知る手段として考え、ほどほどにしては？ と私は思います。(大きなお世話?!)

卒業して社会人になると、予想以上に自分の時間がとれません。多くの先輩方は、『学生の時にバイトばかりしないで、自分の自由になる時間にやりたいことをやっておけば良かった』と、後になって思うようです。

人それぞれ事情はあるでしょうが、「私は何のためにこの学校へ入学したのか？」そして、「自分の一生の中で18～20歳という年代は、どんな時で何をしておくべきか？」改めて考えてみてはいかがでしょう。

学生時代は、その人にとってお金とかモノに変えがたい貴重な時であり、その後の人生におおきなインパクト与えると思います。

どうか優先順位を考えて過ごしてください。

誰もが振り返って、いちばん輝いていたと思う時期。また、周りも「学生だから」という目で見てください。失敗を恐れず何にでも積極的に挑戦してみてください！

最後に少し言葉は悪いですが、

「やれる時に、やった者勝ち！」

## 新規受入図書案内

(1999. 4～1999. 7)

### 総記 (000)

#### 〈岩波新書〉

正念場	中村 雄二郎
まちづくりの実践	田村 明
コンクリートが危ない	小林 一輔
心臓外科医	坂東 興
日用品の文化誌	柏木 博
日本の神々	谷川 健一
小国主義	田中 彰
古代エジプトを発掘する	高宮 いづみ
日本の渚	加藤 真
薬物依存	宮里 勝政
現代たばこ戦争	伊佐山 芳郎
歌舞伎ことば帖	服部 幸雄
骨の健康学	林 泰史
ダイビングの世界	須賀 潮美

#### 〈岩波ブックレット〉

人権は普遍なのか	小林 善彦
地方都市再生への条件	矢作 弘
住む人が育てる安心マンション	有馬 百江
周辺事態法Q&A	新ガイドラインを考える会
母乳とダイオキシン	本郷 寛子
なぜいま結核か	森 亨

コミュニケーションの心理学	松尾 太加志
変わるメディアと社会生活	児島 和人
ゲーテンベルクの謎	高宮 利行
出版社を読む	塩澤 実信
日本初期新聞全集	北根 豊

### 哲学 (100)

聖母マリア	竹下 節子
ソーシャル・スキル・トレーニング	渡辺 弥生
カウンセリング	内山 喜久雄
行動療法	〃
自立訓練法	佐々木 雄二
プレイセラピー	高野 清純



アートセラピー 徳田 良仁  
 交流分析 杉田 峰康  
 ロールプレイング 台 利夫  
 リラクゼーション 山口 正二

歴史 (200)

南紀徳川史 堀内 信  
 肖像画を読む 黒田 日出男  
 日朝交流史 季 進熙  
 韓国の歴史 曹 昌淳  
 わかりやすい韓国の歴史 韓国教育開発院  
 入門韓国の歴史 国史編纂委員会  
 名補佐役の条件 渡部 昇一  
 将たる者の器量 会田 雄次  
 スイスの歴史と文化 森田 安一  
 つくられた明君 鈴木 一夫  
 ドイツここが見たい! 10都市紀行 相原 恭子  
 コンピューターで歴史を読む E・モーブリー  
 歴史 大庭 脩  
 東アジアの王権と思想 渡辺 浩  
 物語中国の歴史 寺田 隆信

社会科学 (300)

製造物責任関係訴訟法 塩崎 勤  
 実践生徒指導・教育相談 内山 喜久雄  
 比較憲法学 酒井 吉栄  
 主要国政治システム概論 中村 勝範  
 DNA鑑定と刑事弁護  
 日本弁護士連合会人権擁護委員会  
 世界の行政改革 日本比較政治学会  
 都市計画と都市生活 石田 頼房  
 癒しと和解への旅 坂上 香  
 情報教育の考え方・進め方 山極 隆  
 イギリスに学ぶ成熟社会のまちづくり 高見沢 実  
 検証イギリスの都市再生戦略 都市みらい推進機構  
 世界に問われる日本の刑事司法 庭山 英雄  
 マルサス人口論の200年 岡田 実  
 経営革新と新規創業の時代へ 中小企業庁  
 財務・会計 J・リビングストーン  
 時価主義を考える 田中 弘  
 資産運用の理論と実際 浅野 幸弘

資本市場とコーポレート・ファイナンス 新井 富雄  
 財政の現状と展望 財政政策研究会  
 とんでもない母親と情けない男の国日本 マークス 寿子  
 ひ弱な男とフワフワした女の国日本 〃  
 家族 丸島 令子  
 都市の快適住居学 宮脇 壇  
 住まいとこころの健康 小俣 謙二  
 「家をつくる」ということ 藤原 智美  
 オトメの祈り 川村 邦光  
 平安朝女性のライフスタイル 服部 早苗  
 ジェンダーの西洋史 井上 洋子  
 わかりやすい家族関係学 山根 常男  
 社会福祉の専門技術 大塚 達雄  
 福祉サービスの基礎知識 三浦 文夫  
 介護保険と協同組合福祉 蟻塚 昌克  
 よくわかる社会福祉施設 全国社会福祉協議会  
 「伸びる」職員実践教室 久田 則夫  
 ジェネラル・ソーシャルワーク 太田 義弘  
 介護保険総点検 川村 匡由  
 これが介護保険時代の生きる道 岡本 祐三  
 社会生活力プログラム・マニュアル 赤塚 光子  
 インテリアの地震対策 北浦 かほる  
 子どもの生活と施設 浅倉 恵一  
 子どもの世界と福祉 竹中 哲夫  
 ビジュアル子どもと家庭 全国社会福祉協議会  
 児童相談所で出会った子どもたち 児童相談所を考える会  
 社会福祉施設実習 大塚 達雄  
 医療福祉援助論 細井 恵美子  
 新医療福祉論 大野 勇夫  
 教育権の歴史と理論 上・下 牧 征名  
 教育の自由と平等 〃  
 学校と教師の教育権 上・下 〃  
 公教育の原理と教育を受ける権利 〃  
 子どもの権利への視座 上・下 〃  
 子どもの人権と学校 上・下 〃  
 エッセンシャルズ教育心理・生徒指導・教育相談 二宮 克美  
 心理学と教育実践の間で 佐伯 胖  
 子どもの時代 M・ハイニンガー  
 教育の戦争責任 長浜 功  
 近代の児童労働と夜間小学校 石井 昭示  
 ドイツ・エリート養成の社会史 望田 幸男  
 アメリカの多文化教育 横田 啓子

アメリカ教育改革の動向 佐藤 三郎  
 危機に立つアメリカの生徒たち P・ウェルシュ  
 自己意識とキャリア形成 米川 英樹  
 学び方の学習 水越 敏行  
 特別活動を学ぶ 酒向 健  
 実践からみた特別活動のあゆみ 外村 近  
 生きる力をはぐくむ特別活動 品田 毅  
 高校生の自主活動と学校参加  
 日高教・高校教育研究委員会  
 新保育学 岡野 雅子  
 発達心理学 村井 潤一  
 日本の中学生 千石 保  
 よみがえれ公立中学 志水 宏吉  
 障害学入門 石部 元雄  
 学習障害(LD)ってなに? 高野 清純  
 ホームスクールの時代 M・メイベリー  
 ウェディング・ドレスの歴史 尾塚 理恵子  
 日本衣服文化史要説 山名 邦和  
 性とスーツ アン・ホルンダー  
 服飾文化論 小池 三枝  
 食べることの社会学 D・ラプトン  
 ヨーロッパの祭と伝承 植田 重雄  
 ケルト妖精学 井村 君江  
 憲法 佐藤 幸治  
 人工生殖の法律学 石井 美智子  
 21世紀の会計評価論 中野 勲  
 企業会計法と時価主義 弥永 真生  
 現代の地方財政 和田 八束  
 21世紀家族へ 落合 恵美子

### 自然科学 (400)

「科学革命」とは何だったのか S・シェイピン  
 測色による色彩管理の知識 浦畑 育生  
 化学の未来へ 近畿化学協会  
 生物改造時代がくる マイケル・ライス  
 バイテク・センチュリー J・リフキン  
 行動誌入門 中谷 勝哉  
 医学への招待 川喜田 愛郎  
 生命の暗号を解読せよ  
 日本放送協会人体プロジェクト  
 脳の働きと脂質 奥山 治美  
 食品中の生体機能調節物質研究法 川岸 舜郎  
 がんの予防 美濃 真

成人病とビタミン 美濃 真  
 プロがすすめるダイエット 日本健康運動指導士会  
 糖尿病の人の朝昼夕献立カレンダー 香川 芳子  
 骨粗鬆症 美濃 真  
 こころの健康百科 大塚 俊男  
 成人病を防ぐ現代人の食事学 井上 勝六  
 現代の医食同源 和田 昭允  
 医食同源の最新科学 飯野 久栄  
 食物繊維の科学 辻 啓介  
 家族と医療 唄 孝一

### 工学・技術 (500)

階段物語り INAXギャラリー企画委員会  
 彩適空間への道 荻原 正三  
 爆発するメトロポリス W・H・ホワイト  
 都市は「ふるさと」か F・レンツ＝ローマイス  
 きもの文化史 河籍 実英  
 住居空間の人類学 石毛 直道  
 環境計画論 田村 明  
 プライド・オブ・プレイス シヴィック・トラスト  
 アーバン・ゲーム M・ケンツレン  
 建築VSハウジング マーティン・ポウリー  
 建築空間 P・ブドン  
 建築について フランク・ロイド・ライト  
 建築形態のダイナミクス 乾 正雄  
 現代建築事典 神代 雄一郎  
 思想としての建築 栗田 勇  
 建築鑑賞入門 W・W・コーディル  
 住宅と宮殿 ル・コルビュジェ  
 建築とは何か B・タウト  
 建築の現在 長谷川 堯  
 フランク・ロイド・ライト 谷川 正己  
 図説日本住宅史 太田 博太郎  
 新桂離宮論 内藤 昌  
 江戸建築と本途帳 西 和夫  
 北欧の建築 S・E・ラスマッセン  
 空間としての建築 ブルーノ・ゼーヴィ  
 日本の近代建築 稲垣 栄三  
 ラスベガス R・ヴェンチャーリ  
 イタリアの現代建築 V・グレゴッティ  
 タリアセンへの道 谷川 正己  
 ライトと日本 “ ”  
 バウハウス 杉本 俊多

近代建築の失敗	R・ブレイク	地域共生のまちづくり	三村 浩史
モデュロール	ル・コルビュジェ	見えがくれする都市	榎 文彦
人間の家	〃	広場の造形	C・ジッテ
オレゴン大学の実験	宮本 雅明	環境照明のデザイン	石井 幹子
住宅論	篠原 一男	住環境の都市形態	P・パヌレ
アメリカ住宅論	V・スカーリー	都市の道具	栄久庵 祥二
日本の公園	田中 正大	生活環境論	久米 直明
現代絵画の解剖	木村 重信	アメリカ大都市の死と生	J・ジェコブス
環境とデザイン	G・エクボ	素材と造形の歴史	山本 学治
鏡	由水 常雄	建築家なしの建築	B・ルドフスキー
装置としての都市	月尾 嘉男	建築家の発想	石井 和紘
空間と情緒	箱崎 絵一	実在・空間・建築	ノルベルク・シュルツ
ルイス・マンフォード	木原 武一	建築をめざして	ル・コルビュジェ
キモノ・マインド	R・ルドフスキー	建築環境論	岩村 和夫
都市憲章	磯村 英一	芸術としての建築	S・アバークロンビー
新しい都市の人間像	R・イールズ	庭園から都市へ	材野 博司
メガロポリス	木内 信藏	東方への旅	ル・コルビュジェ
住まいの原型	泉 靖一	環境デザインの思想	三輪 正弘
行動・文化とデザイン	清水 忠男	幻想の建築	坂崎 乙郎
アルヴァ・アアルト	武藤 章	デザインの認識	R・ソマー
天上の館	ジョン・サマーソン	水空間の演出	鈴木 信宏
近代建築	J・スカーリー	プレジジョン 上・下	ル・コルビュジェ
SD海外建築情報	岡田 新一	モラリティと建築	D・ウトキン
カテドラルを建てた人びと	J・ジェンベル	日本の空間構造	吉村 貞司
空間の生命	坂崎 乙郎	京の町家	島村 昇
都市形成の歴史	アーサー・コーン	現代の民家再考	降幡 廣信
私と日本建築	A・レーモンド	日本民家紀行	高井 潔
現代のコートハウス	D・マッキントッシュ	茶匠と健康	中村 昌生
都市デザインの系譜	相田 武文	ペルシア建築	A・U・ポープ
輝く都市	ル・コルビュジェ	西洋建築様式史 上・下	F・バウムガルト
ふれあいの空間のデザイン	清水 忠男	古典建築の失われた意味	J・ハーシー
人間のための都市	河合 正一	ヴィラール・ド・オヌクールの画帖	藤本 康雄
かわいい	材野 博司	ゴシック建築の構造	ロバート・マーク
イタリア都市再生の論理	陣内 秀信	ル・コルビュジェ	C・ジェンクス
三つの人間機構	ル・コルビュジェ	インターナショナル・スタイル	
都市計画	日笠 端		H・R・ヒッチコック
都市の街割	材野 博司	表現主義の建築	W・ペーント
まちづくりの新しい理論	C・アレグサンダー	エスプリ・ヌーヴォー	ル・コルビュジェ
コミュニティとプライバシー	S・シャマイエフ	アドルフ・ロース	伊藤 哲夫
まちづくりゲーム	ヘンリー・サノフ	英国貴族の邸宅	田中 亮三
水のデザイン	D・ベーミングハウス	ミス・ファン・デル・ローエ	D・スペース
ユルバニスム	ル・コルビュジェ	オットー・ワグナー	H・ゲレーツェッカー
街の景観	G・バーグ	ヴィオレ・ル・デュック	羽生 修二
遊び場の計画	R・ダットニー	トニー・ガルニエ	吉田 鋼市
英国都市計画とマスタープラン	中井 検裕	スペインの建築の特質	F・チュエッカ

アントニオ・ガウディ	鳥居 徳敏	宮脇壇の「いい家」の本	宮脇 壇
パラディオへの招待	長尾 重武	宮脇壇の住宅設計テキスト	宮脇壇建築研究室
カルロ・スカルパ	A・F・マルチャノ	シティライフの住宅設計	伊藤 真一
ジュゼッペ・テッラーニ	ブルーノ・ゼーヴィ	外観の上手なまとめ方	伊藤 高光
ブルネッレスキ	浅井 朋子	わが家の間取りこれに決めた	設計協同フォーラム
アルド・ロッシ自伝	アルド・ロッシ	暮らしから描く健康な住まいのつくり方	吉田 桂二
ボッロミーニ	長谷川 正允	よむ住宅プランニング	宮本 健次
ヴェネツィア	陣内 秀信	新感覚の二世帯住宅	講談社
アメリカ建築とアーバンイズム	上・下	二世帯住宅のノウハウ	吉田 桂二
	W・スカーリー	台所・食事室設計マニュアル	永森 一夫
イギリス建築の新傾向	R・ランダウ	キッチン	ジル・ピラローシャ
建築の多様性と対立性	R・ヴェンチュエリ	バスルーム	ジュニー・L・ピュー
自然な構造体	F・オットー	ベッドルーム	〃
ガラスと建築	INAXギャラリー企画委員会	リビングルーム	メリンダ・レビン
木造在来工法2階建住宅	建築工程図編集委員会	床と間の作法と実例集	小林 盛太
鉄筋コンクリート造3階建ビル	〃	浴室洗面トイレ設計マニュアル	永森 一夫
地域福祉施設	建築思潮研究所	「いえ」と「まち」	鈴木 成文
地域とともにつくる原風景	〃	伝統のインテリア・デザイン	吉岡 幸雄
建築計画の展開	W・ペニヤ	コーディネーターのための	
マルチ・メディア時代の読書空間	建築思潮研究所	インテリアスタイリングブック	塩谷 博子
高齢者・障害者の住宅	〃	インテリアデザインとは何か	三輪 正弘
文化の時代にふさわしい活動の場	〃	照明デザイン入門	中島 龍興
ユニバーサルデザインとはなにか	古瀬 敏	暮らしを彩る「あかり」の本	松下電工くらしのあかり研究
老人保健施設・ケアハウス	建築思潮研究所		
図解バリアフリーの建築設計	荒木 兵一郎	非イオン系合成洗剤	小林 勇
2×4工法2階建住宅	建築工程図編集委員会	化粧品の科学	尾沢 達也
渡辺篤史のこんな家を建てたい	渡辺 篤史	日本の伝統工具	土田 一郎
住まいとほどよくつきあう	宮脇 壇	マンションの住まい学	日本総合住生活
それでも建てたい家	〃	日曜日の住居学	宮脇 壇
住まいづくりの本	日本建築士会連合会	健康住宅のすすめ	木山 恵世
新感覚の木造住宅	講談社	日本の庭園	田中 正大
新感覚の高齢者にやさしい住まい	〃	作庭記からみた造園	飛田 範夫
絵典世界の建築に学ぶ知恵と工夫		ヨーロッパの造園	岡崎 文彬
	J・S・タイラー	庭をたのしむ	寺岡 雅明
こんな家に住みたかった	藤塚 光政	ディスプレイデザイン	高橋 信裕
家族関係をよくする家づくり	天野 彰	四つの交通路	ル・コルビュジェ
新感覚の三階建て住宅	講談社	芸術空間の系譜	高階 秀爾
40歳からの快適居住学	林 玉子	部族社会の芸術家	M・W・スミス
都市・住宅論	東 孝光	ゴシック 上・下	H・フォション
住まいのアウトドア・リビング100章	村田 靖夫	ロマネスク 上・下	〃
高齢者とともに暮らす三世帯住宅100章	棚沢 成明	日本美の特質	吉村 貞司
渡辺史のこんな家に住みたい	渡辺 篤史	光の死	森 洋子
住まいのアイデアスケッチ集	丸谷 博男	イタリアの美術	中森 義宗
住まいづくりの知恵ぶくろ	吉田 研介	道具考	栄久庵 憲司
間取りの上手なまとめ方	伊藤 高光	屋外彫刻	M・A・ロビネット

木の文化 小原 二郎  
 キュビズムへの道 D・H・カーンワイラー  
 木のこころ ジョージ・ナカシマ  
 フラクタル造形 三井 秀樹  
 現代デザイン入門 勝見 勝  
 椅子のデザイン小史 大広 保行  
 トーメット曲木家具 カール・マンク  
 サウンドスケープ 鳥越 けい子  
 劇場の構図 清水 裕之  
 江戸と江戸城 内藤 昌  
 エーロ・サーリネン 穂積 信夫  
 これからの家 快適住居研究会  
 3階建て住宅間取り集 ニューハウス出版  
 健康な住まいを考える 下平 勇  
 風景のコスモロジー 吉村 元男  
 ウィリアム・モリス 藤田 治彦  
 日本建築の空間 井上 充夫

### 産 業 (600)

現代商業の課題と展開 實多 國弘  
 集落拡大と集落基盤整備計画 岩田 俊二  
 図説集落 日本建築学会  
 人と地域をいかすグリーン・ツーリズム  
 21ふるさと京都塾  
 新たな漁業秩序への胎動  
 食料・農業政策研究センター  
 図説日本庭園のみかた 宮元 健次  
 子どものための遊び環境 ロビン・ムーア  
 あそび環境のデザイン 仙田 満  
 漁業考現学 地域漁業学会  
 地域商業近代化・活性化の実践マニュアル  
 赤松 良一  
 現代の流通経済 城田 吉孝  
 アジア危機をよそに拡大する世界の直接投資  
 日本貿易振興会

### 芸 術 (700)

女の装身具 長崎 巖  
 丹波 河原 正彦  
 おしゃれな色の選び方 ファッションカラー編集部  
 19・20世紀の美術 高階 秀爾

17・18世紀の美術 辻 惟雄  
 江戸の絵を読む 小林 忠  
 生活造形の美意識 吉岡 徹  
 色の本棚 視覚デザイン研究所

### 語 学 (800)

ニュース英語パワーボキャビル4000語 小林敏彦  
 外国語の効果的な学び方 ジョン・ルビン  
 放送英語と英語教育の研究 小池 直己  
 大学生の英語学習ハンドブック 研究社出版編集部  
 楽しいドイツ語 関口 一郎

### 文 学 (900)

シーラという子 トニー・ハイデン  
 漱石の記号学 石原 千秋  
 芥川龍之介とその時代 関口 安義  
 十七歳 井上 路望  
 萱野茂のアイヌ神話集成 平凡社  
 ジルキ博士とハイド氏 A・ハーフマン  
 シェークスピアをめぐる航海 大井 邦雄  
 「ファウスト第1部」を読む 柴田 翔  
 「ファウスト第2部」を読む  
 詩人と女性 山村 嘉己

